



特定非営利活動法人

アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2015年

- ・ 2015-12-14 [イナラ小図書室完成](#)
- ・ 2015-11-10 [地元初の有機農業促進イベント](#)
- ・ 2015-10-07 [小学校から高校へ引き継がれる菜園活動](#)
- ・ 2015-09-18 [Culture Dayについて思うこと](#)
- ・ 2015-08-30 ["My Dream" スピーチコンテスト](#)
- ・ 2015-08-15 [コンテナ図書室で成人教育](#)
- ・ 2015-07-22 [7月12日講演会のレポート](#)
- ・ 2015-06-12 [卒業生がTAAAスタッフになりました](#)
- ・ 2015-05-23 [2015年5月17日 作業の報告](#)
- ・ 2015-05-12 [2014年度の活動をふり返って](#)
- ・ 2015-04-18 [クワズ-ルー・ナタール州環境省よりサポート賞を受賞](#)
- ・ 2015-04-04 [ズール村でまだ活躍中の移動図書館車「いずみ号」](#)
- ・ 2015-02-26 [3団体で要請書を送付いたしました](#)
- ・ 2015-02-11 [1月12日（月・祝）TAAA講演会（5）](#)
- ・ 2015-02-07 [1月12日（月・祝）TAAA講演会（4）](#)
- ・ 2015-02-05 [1月12日（月・祝）TAAA講演会（3）](#)
- ・ 2015-01-31 [1月12日（月・祝）TAAA講演会（2）](#)
- ・ 2015-01-31 [1月12日（月・祝）TAAA講演会（1）](#)

2015-12-14 南アフリカ

イナラ小図書室完成



イナラ小はジョージ・ンベレ高（ウムズンベ高より校名変更）と共に今年度より図書活動の対象校となりました。パートナーのサンディーアの母校であることから、私自身かなり前から両校を訪問してはいたのですが、対象校として支援ができるようになりうれしく思っています。

高校は数年前に、小学校は最近新校舎が建設され、設備的にはよくなっています。しかし、高校の図書室には蔵書がほとんどなく、全く利用されていない状況だったことから、TAAAから本の寄贈、図書委員会の設置や司書教師への指導を行うことで図書室のシステムが整い、図書室が利用できるようになりました。

イナラ小は新校舎の建設が始まった時、1教室を図書室として利用できるよう、本棚の設置が約束されていたそうです。ところが、建設終了時点で本棚は設置されず、学校側では途方に暮れていきました。

そのようなタイミングで明治大学商学部の船橋さん、ゼミの皆さんから学校支援のお話をいただきました。

当初はいただいた寄附金で家具の本棚を数本購入する予定でしたが、広い教室なので、プロジェクトから少し資金を足して本棚を取りつけることにしました。

今年度中に学校側でテーブルといすを設置し、1月の新学年より正式に図書室として利用されます。

イナラ小の司書教師であるクマロ先生は、TAAAやELITS（教育省図書部門）の教師研修会に参加して図書活動の十分な知識を身につけており、すでに図書委員会も設立しています。

これまで移動図書館車からの本を利用して活動を行ってきましたが、学校図書室が完成して大変喜んでおり、来年の活動計画もたてているようです。

クリスマス休暇中も学校に出てきて図書室開設の準備を行うと話していました。



イナラ小、ジョージ・ンベレ高両校の校長、そしてサンディーレも母校へのサポートを心から感謝していると話していました。

(平林薫)

[Page Top ▲](#)

2015-11-10 南アフリカ

地元初の有機農業促進イベント



9月9日に地域内のEsibaniniホールにて有機農業促進イベントを開催し、対象校39校の担当教師と生徒が集いました。他にも、カウンターパート団体、自治体職員等が参加し、合計130名を超える出席がありました。

それぞれの対象校は自分たちの学校菜園で収穫した野菜を披露し、生徒たちは順番に有機農業に関する詩や寸劇、ポスターを見せながらの発表等を行いました。彼らの素晴らしい発表には、他校の教師や生徒、ゲストが感嘆の声を上げていました。

また、卒業生グループを代表してMthwalumeグループのNgidi氏がスピーチをしましたが、熱のこもった話しぶりに会場から大喝采があがりました。

Mr.HaighはEnalen農場として展示を出し、出席者のモチベーションを高めるスピーチをしました。カウンターパートの州教育省Mrs.Zamisaと州農業省Mrs.Gidaからは活動促進へのメッセージ、州環境省Mr.Zamaとウムズンベ自治体Ms.Mlhanguからも出席者への激励の言葉をもらいました。

TAAAはカウンターパートのURDOメンバーと準備段階から共同作業を進め、当日はURDOメンバーが中心となって進行し、事業終了後の活動のまとめ役としての大活躍してくれました。会場のセッティングや飾り付けなど、すべてTAAAスタッフが行い、また、軽食の一部を卒業生グループメンバーや保護者に調理してもらう等、手作り感のあるイベントとなりました。

生徒が小さいため出席させられなかったジュニアプライマリーの教師からは、“私の生徒たちも詩や歌を作ったので、校内でこのような発表の機会を設ける”と話していました。

対象地域で、今回のような有機農業を促進するイベントが開かれるのは初めてのことです。イベントでは対象校と事業関係者の連帯感が強まり、事業終了後もそれぞれが活動を盛り上げて行ってくれることを確信しました。

(平林薫)

[Page Top ▲](#)

2015-10-07 南アフリカ

小学校から高校へ引き継がれる菜園活動



小学校から活動に参加した生徒たちが、高校に進んで菜園委員会メンバーとして活躍する例がよく見られるようになりました。そして、彼らのお陰で、高校の菜園がとてもよくなっています。例として、トゥルベケ小学校があげられます。この小学校は全校生徒が菜園活動に従事しており、活動は生徒の学校生活の一部となっています。活動は自然科学の授業にも取り入れられ、畑作りの成果が成績にも影響することから、生徒たちは熱心です。州農業省の地域菜園コンテストで3位に入賞するなど、菜園に情熱をもやすドラドラ校長のリーダーシップの下、活動がますます活発になってきています。

この小学校からシボングジュケ高校に進んだ生徒たちの活躍によって、以前は停滞ぎみだったシボングジュケ高校の菜園はどんどん良くなってきており、また、生徒の有機農業の知識も向上しています。実際に高校14校で行った有機農業の知識を問うテストでは、シボングジュケ高の生徒の正解率は平均87%と1位になりました。小学校で十分に知識と技術を習得した生徒が高校に進み、畑作りに情熱を持った生徒が菜園委員会メンバーとして活躍している結果です。

早い時期に楽しみながら畑作りを学び、継続して活動を行うことが重要であることを改めて感じています。彼らのなかから将来就農を目指す生徒たちが出てきています。「継続は力なり」。それには、私達支援する方は、焦らずに待つことも大切です。

(平林、久我編集)

[Page Top ▲](#)

2015-09-18 南アフリカ

Culture Dayについて思うこと



対象校を訪問すると、よく生徒達がズールーの伝統ダンスを練習している姿を目にします。 ドン、ドン、ドンと威勢のいい太鼓に合わせて、思い切り足を蹴り上げる独特な踊りです。 学校間で伝統ダンスのパフォーマンスを競う“Culture Day”に向けて練習しているのです。 私は以前は練習風景を微笑ましく眺めていました。「対象地域のような田舎で、ズールーの文化がしっかりと継承されているんだな」と。 実際、写真の通り、彼らの踊りは本当にほれぼれするほど素晴らしい！ 地方における若者の文化継承は教育省の方針のようで、プロジェクトマネージャーの話によると、生徒たちはかなり多くの時間を練習に費やしているようです。

しかし、普段の授業が全くもって不十分で、特に英語ができないために、授業が理解できず、それゆえ将来の道が閉ざされている生徒たちを知るにつれ、教育省が後押しする熱心な練習ぶりを少し複雑な気持ちで見るようになりました。

もちろん、自分たちの文化に誇りをもち、継承していくことは大切です。多民族・多文化国家であり、黒人の文化を劣ったものとみなすアパルトヘイト時代を経た南アフリカにおいては、格別に重要なことがあります。 しかし、この練習によって、ただでさえ不十分な授業が削られ、ただでさえ不足している教師たちは、基礎学力に充てる時間をダンス指導に奪われています。伝統ダンスをマスターすることで、将来南アで食べていく道が拓けるのならいいでしょう。 しかし、現実はそうではありません。

私は、ズールーの伝統ダンスは芸術の域に達する素晴らしい文化だと高く評価していますし、その素晴らしい文化の継承はとても大切なことだと認識しています。 しかし、そのために、不利な立場にいる田舎の生徒たちが基礎学力を習得する時間が削られていくのを心配しています。 バランスが大切なのではないでしょうか。 特に若者失業率の高い対象地域においては（自治区の若者（15－34歳）の失業率は62.6%。全国179自治体中8位）。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2015-08-30 南アフリカ

"My Dream" スピーチコンテスト



シノクボンガ中学校は、元ルトワーリ高のマカンヤ先生と司書のドルングレ先生がしっかりと活動をしています。 マランヤ先生は、TAAAがコンテナ図書室を寄贈したルトワーリ高校で司書教師をしていました。図書委員会生徒たちの自主性を育てあげ、生徒主導のイキイキとした図書室を作り上げた伝説の先生です。

昨年末に、シノクボンガ中学校に教頭として赴任になりました。

そんなマランヤ先生の指導の下、司書教師のドルングレ先生は、整理整頓がいきとどいた図書室を作っています。

この中学校で、"My Dream"プロジェクトのスピーチコンテストがありました。 自分の将来の夢を英語で作文にして発表するコンテストです。 1位になったのはソーシャルワーカーを目指す8年生のシンピエさん。 9年生を相手に堂々の優勝です。シンピエさんは、日々活発な図書活動が行われているバンギビーゾ小学校出身です。 バンギビーゾ小の司書教師のザマ先生が熱心に指導してくれていた成果だと感じました。 2位になった9年生の女子生徒の夢は科学者でした。

スピーチコンテストに優勝、入賞した生徒たちには、TAAAから一冊づつ本のプレゼントをしました。 家には本が一冊もなく、本は借りることはできても、自分の本がない生徒たちにとっては、"My Book"は宝物です。

笑顔が可愛いシンピエさんですが、ドルングレ先生の話によると、母親は蒸発し行方不明で父親はアル中。 年老いた祖父の面倒をみながら家事一切をこなして暮らしているとのこと。「彼女の生活は苛酷です。でも、制服をしっかり洗濯して清潔な身なりで学校にくるから、しばらくは気づかなかった。彼女は毎日宿題をこなしてくる優等生なんです。 将来の夢がソーシャルワーカーなのは、きっと彼女自身が助けられた経験があるからでしょう」。 この地域では、シンピエさんのケースは、けして例外ではありません。

小さな肩にたくさんの荷物をかかえて生きている生徒たち。 彼らのために、私達が本が読める環境を作ることは、単に読解力向上だけでなく、本のなかで色々な世界を楽しんでもらいたいという思いもあるからです。

(平林、久我)

[Page Top ▲](#)

2015-08-15 南アフリカ

コンテナ図書室で成人教育



現地視察訪問をしていて一番嬉しい瞬間は、「プロジェクトが彼らのものになった」または「彼らのものになりつつある」という手応えを感じた時です。 今回の8月初旬から一週間の視察訪問でも、そんな嬉しい場面に何度も出会いました。

その一つが、ムナフ小学校。 この小学校はグレードR（プレスクール）から小3までのジュニア・プライマリですが、校舎が小さくて図書室を作るスペースのない学校でした。 しかたがないので、教室に本棚を置いて図書コーナーを作っていましたが、管理が難しく、またその教室以外の生徒は本を借りることができないので、コンテナ図書室を長年待望していました。 しかし、TAAAとしても資金不足のなか、コンテナ図書室の寄贈先として高校を優先していたので、ムナフ小学校には長い間待ってもらうしかなかったのです。

大変ありがたいことに、今年度は「ひろしま・祈りの石国際教育交流財団」から助成金をいただくことになり、6月によくやくムナフ小学校にコンテナ図書室を寄贈することができました。

そんなムナフ小学校を今回訪ねてみるとプロジェクトマネージャーも知らなかつた嬉しい驚きがありました。なんと、放課後、このコンテナ図書室を地元住民のための成人教室としても活用しているというではありませんか。

成人教育の参加住民は、今までの人生で一度も学校に行ったことがない人から、高校卒業の試験に合格できなかつた元高校生まで含めて96人だそうです。 彼らをレベル別に分けて、先生たちは毎日放課後ボランティアで教えているとのこと。

TAAAの長年の学校図書支援プロジェクトの延長上として、将来、地元住民にも開かれたコミュニティ図書支援活動ができるといいね、とよくプロジェクトマネージャーとは話していましたが、このように学校の方から積極的に地元住民にオープンな図書室活用をしてくれて、とても嬉しく、頼もしく思いました。 TAAAからのささやかなプレゼントを自分たちのアイデアで何倍にも価値の高いものにしていく。学校とTAAAとの協力関係はどんどん進展しています。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2015-07-22 南アフリカ

7月12日講演会のレポート



7月12日（日）9：30～11：30、市ヶ谷のJICA地球ひろばにて、TAAA講演会が開催されました。最初に浅見会長から挨拶があり、第1部はTAAA南アフリカ事務所代表の平林薫による報告、第2部は東京農業大学の稻泉教授による講演、という構成でした。

浅見会長からは、今、現地では自立の芽が出てきており、我々にとっては歴史的転換点という話がありました。10数年前に南アを視察した際は、寄贈した移動図書館車が草原に置かれたままとなっており、愕然としたとのこと。やはり物をあげるだけでは不十分であり、ソフトの部分が重要です。ここにきて、運営委員をやっていた生徒が卒業してTAAAのスタッフに加わるようになり、まさに真の意味での支援につながってきました。

平林さんからは、南アの状況、菜園プロジェクト、図書プロジェクトに関する報告がありました。南アは現在、2人に1人は失業している状況であり、電気の普及率は49%、水道の普及率は5.1%と相変わらず厳しい状況です。アパルトヘイトはなくなりましたが、ずっと負のスパイラルが続いています。そのような中、学校は地域の中心であり、TAAAは学校にアプローチをかけて活動を続けています。

菜園プロジェクトでは委員会が活動の中心となっており、上級生が下級生に教えるようになってきています。また、先生が一生懸命になると、それが生徒へも伝わっていくようです。ジュニアの生徒たちはお母さんと一緒に活動していますが、高校生になってからいきなりスタートしても続かないことがわかつてきました。早い段階から始めることが良さそうです。通常の活動に加え、リチャード氏の農場見学や、ピーターマリツバーグの農業展示会見学なども織り交せており、これらは子どもたちにとって良い経験となっています。

図書プロジェクトでは、移動図書館車の運行に加え、今回は助成金をもらえたことからコンテナ図書室も設置しました。英語の本はもちろん、教材自体が少ないので、算数セットもとても喜ばれています。子どもたちだけでなく、実は先生も図書室を使った経験がないことも多いため、まずは先生に図書室の利用方法・マネジメント手法を学んでもらう必要があります。なお、残念なことに図書室が荒らされてしまうこともありますが、司書の常駐など対策を打ちつつ、活動を継続しています。



次に稻泉先生からは、学術的な視点で、南アの農業、TAAAの菜園プロジェクトを分析していただきました。南アの農業を各種統計、対GDP比率の観点でみると、それほど大きなインパクトはありませんが、地域・個人の視点に立つと、より積極的な意義があると指摘されました。それは、農業の雇用吸収力が期待されており、個人の社会的自立の契機となるためです。

TAAAの菜園プロジェクトについては、実施者、運営方法、利用方法、授業科目との連動、食育活動などの項目で整理し、客観的な解説を加えていただきました。特に印象的だったのは次のエピソードです。稻泉先生が子どもたちに好きな野菜と嫌いな野菜を質問したところ、好きな野菜はニンジン・ホウレンソウ、嫌いな野菜はキャベツ、との回答がかえってきました。なぜか。キャベツは虫食いが多く、手入れが大変なためです。これこそまさに、TAAAの菜園プロジェクトが現

地に根付いている証拠である、と指摘されました。

最後には、ルソーの「エミール」から推察される農業の教育力や、日本との連携の可能性などにも言及され、本講演会は幕を閉じました。次回の講演会は今年12月、さいたま市で予定しております。ぜひふるってご参加ください。

(丸岡)

[Page Top ▲](#)

2015-06-12 南アフリカ

卒業生がTAAAスタッフになりました



4月から支援対象校の卒業生の一人が、TAAA現地アルバイト・スタッフになりました。張り切って活動をしています。ルトウーリ高校出身のモンドリ・チリザ君です。モンドリ君は昨年度まで、図書委員として学校の図書活動を引っ張っていました。

ルトウーリ高校は、TAAAが2012年にコンテナ図書室を寄贈した学校ですが、それまで図書室がなかったとは考えられないくらい、図書の貸し出しが多く、図書活動が活発に行われている学校です。図書室を立派に機能させたのは、図書委員会生徒たちでした。

図書室運営をできるだけ図書委員会生徒たちに任せているという、司書教師のマカンヤ先生は、「図書委員会活動は、彼らの運営能力が磨かれるだけでなく、自主性が育つ」と喜んで、いつも彼らを見守っていました。生徒達は自分たちで貸し出しルールを考案し、貸し出しカードも手作りしました。私が2013年に視察訪問した際は「僕たちの図書室は日々改善しています」との頼もしい言葉を聞きました。

とにかく本が大好きで、休み時間や放課後はいつも図書室にいたモンドリ君。今は、自身の図書委員会活動での経験を生かして、対象校40校の図書委員会生徒たちを指導してくれています。今年度は、各校の図書委員会生徒たちへのエンパワーを目指しているので、モンドリ君には大いに期待したいです。

ルトウーリ高校の図書委員会活動については、2013年9月25日付け活動日誌 [「生徒が自主運営する学校図書活動」](#)をご参照ください。

(久我)

[Page Top ▲](#)

2015-5-23 日本

2015年5月17日 作業の報告



爽やかな風が吹く気持ちのいい日曜日。

今日の作業には、千葉県の富里小学校より、生徒さん5名、ご父兄3名、先生1名 合計9名の皆さんのがご参加くださいました。

富里小学校の皆さんには、以前に算数セットを集めて、TAAAに送ってくださいり、今日は作業のお手伝いにと、遠路来て下さったのです。

今日は、TAAAスタッフも9名（鯨井さん・野田さん・浅見さん・丸岡さん・大友さん・高野さん・梶村さん・横山晃祐さん・西村）参加。

小学生の参加を楽しみにしていた鯨井さんは、皆さんに見て頂こうと、お手製の資料を用意して、一番乗りで作業場に到着しました♪

そこへ、元気いっぱいの小学生が加わり、かつてないほどの混雑ぶりでした。

しかし！人数が増えても、小学生なので、平均年齢は上がらず・・若さあふれる作業場でしたね、皆さん、ありがとうございます♪

鯨井さんの資料を配って、簡潔＆にこやかに丸岡副代表が手順を説明して、さあ、いよいよパッキングの開始！

みんなと同じ小学生用の本から始めてもらいました。最初はみんな、こわごわだったけれど、すぐに慣れた様子で楽しそうでした。男の子は、重い箱も、がんばって持ち上げて、腕が痛くなっちゃったね。箱の側面に、平林さん宛のコメントを書いてくれましたので、平林さん、楽しみにしていてください♪

算数セットのパッキングも、工夫してやってくださいましたね。皆さんのが集めて下さった算数セットが出てきて、感動の再会♪自分が使った算数セットを、丁寧に箱につめて、それが海を渡つて、遠い南アフリカに届くと思うと、本当に嬉しいね♪

南アでは、算数セットを授業に使ったり、生徒達が自由に数遊びができるように図書室に置いたりして、活用されています。

最近では、算数セットを送って下さる方が増えていて、「算数セットの寄贈先をネットで探していたら、TAAAのHPにたどり着いた」と算数セットを通してTAAAを知る方々が増えているようです。

私が小学校に入学する時も、算数セットはありました。（45年位前のお話ですが・・汗）

きれいな色で、いろいろな形のこまかいパーツが入っていて、母がその一つ一つに名前を書いて



くれて、これを使って勉強するのかな～と思うと、とても大切な気持ちになって、何回も何回も箱を開けて、中身がちゃんと入っているか確認したのを思い出します。私が使った算数セットは、たぶん捨ててしまったかな。そんな大切なものだったから、他の誰かに使ってもらえたならどんなによかったか・・と今になって思います。

南アの子供たちも、皆さんから届いた算数セットに目を輝かせ、子供らしい色々な工夫をして、楽しく使ってくれているそうです♪

今日は、富里小のみなさんがんばりのお蔭で、NO. 172から始めて、なんと56箱完成！！こんなにたくさん出来上るのは、普段では考えられません。

仕分け作業（本の内容で、学年別・専門別に分ける作業）も、すぐに追いついてしまって、大友さんが頑張ってやって下さいましたが、足りなくなってしまったそうです。

富里小のみなさん、横山さん、今日はお疲れ様でした！！横山さんもたくさんの箱を完成させてくださいましたね。

これからも時々、TAAAのHPを見てくださいね。今日作った箱が、いつ日本を出発して、いつ南アに届くのか、それから、学校へ届くまでの道のりを楽しみにしていてくださいね。そして、今日体験したことを、学校の授業で発表したりできるといいですね。

日本のいろいろな地域から、英語の本や、算数セットやサッカーボールを送ってくださいます。私たちも、その箱を開けるとき、そこの皆さんがどんな風に使っていたのかな？などと想像して、いつもワクワクした気持ちです。

富里小学校の皆さん、遠いから、作業にはいらっしゃれないと思いますが、千葉県からTAAAを応援してくださいね♪

今日は、ありがとうございました！お疲れ様でした～♪

(西村裕子)

[Page Top ▲](#)

2015-05-12 南アフリカ

2014年度の活動を振り返って



皆さまからの暖かいご支援のお陰で、2014年度も「学校図書支援プロジェクト」、「学校・コミュニティ菜園プロジェクト」、「サッカープロジェクト」の3つのプロジェクトを滞りなく行うことができました。 ありがとうございました。

対象地域での活動が2年経過した2014年度を一言で総括すると「普及から定着」といえます。2013年度に始めた3つのプロジェクトは、課外活動として各学校で定着し、多くの学校では、授業にも活用されました。

各学校は、それぞれの環境に合わせて独自の方法で各活動に取り組むようになってきてています。

この普及から定着へとプロジェクトを根付かせた主導者は、なんといっても生徒たちでした。菜園プロジェクトでは「菜園委員会」、図書プロジェクトでは「図書委員会」と、各対象校で委員会を設置したところ、委員会生徒たちには、活動だけでなく、少しづつ管理や運営にも積極的に参加するようになりました。彼らの能力を引き出してくれたのは、TAAAの若い地元スタッフたちです。生徒たちにとって、すっかり兄貴的存在となったスタッフは、委員会生徒たちに、のびのびと自主的に活動に参加させながら、指導を行ってきました。それが奏功したのでしょうか。知識や技術だけでなくリーダーシップも育ってきて、菜園委員会の生徒たちは、他の生徒や保護者に菜園技術を教えて始めたり、図書委員会生徒たちは、自主的にミーティングを開くまでになりました。

こういう委員会活動が、今後、先輩から後輩へと引き継がれ、各校で継続していくには、まだ運営基盤やスキルなどエンパワーが必要です。それは今年度の課題になります。ただ、「生徒が主役」をモットーに活動してきた私たちにとっては、このような芽がでてきたことをとても嬉しく思い、大切に育んでいきたいと思っています。

引き続き、ご支援のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(久我祐子)

[Page Top ▲](#)

2015-04-18 南アフリカ

クワズールー・ナタール州環境省よりサポート賞を受賞



クワズールー・ナタール州環境省主催のSEEPという「学校環境教育プログラム(SCHOOL ENVIRONMENTAL EDUCATION PROGRAM)」がありました。そのプログラムにTAAAの対象校であるバンギビーゾ小学校が参加しました。バンギビーゾ小は、有機菜園活動を活発に行うだけでなく、図書プロジェクトにおいても、段ボール箱に小麦粉を塗って固めた箱を本棚にするなど、リサイクル活動も積極的に行っている学校です。

3月31日には受賞式があり、バンギビーゾ小学校とTAAAが招待されました。受賞式には、ウグ郡全土からプログラムに参加して表彰される学校の他に、州農業省、州水道省、州地域開発省、ウムズンベ自治体代表など州内の各省庁と自治体が出席しました。

プログラムではいくつかのカテゴリーでの表彰が行われましたが、バンギビーゾ小学校は、優秀賞受賞という快挙をなしとげ、さらに有り難いことには、TAAAはサポート賞で1位を受賞しました。

個人では、TAAA南ア事務所代表兼プロジェクトマネージャーの平林薰が受賞し、団体ではTAAAが受賞しました。

事前になにも知らされていなかったので、スタッフ達は驚き、大喜び。TAAAスタッフは全員地元の青年なので、州政府からの地元での受賞は、大きなモチベーションに繋がったようです。

いつも環境保全を念頭に置き、それぞれの学校の地域環境に合わせて、教師、生徒、保護者たちと智恵をしぶり、試行錯誤をしながら活動している私達にとって、今回の州環境省からの受賞は、大きな励ましになりました。

(平林、久我)

[Page Top ▲](#)

2015-4-4 南アフリカ

ズアール村でまだ活躍中の移動図書館車「いずみ号」

この3月末に、ケープタウンから遙か離れたジョージタウンに近い山中の村で地元の教員を中心に活動してきたズアール移動図書館プロジェクトから、何年かぶりでうれしい報告が届きました。TAAAが、所沢市から寄贈された「いずみ号」をズアールに送ったのは1997年のことでした。もう17年も経つのに、あの「いずみ号」がまだ活躍しているとは、うれしい驚きです。今年で識字維持向上活動の15年目を祝ったというズアール移動図書館プロジェクトからの報告を要約して数々の写真と共に紹介いたします。

ズアールでのプロジェクトは相変わらず、奥地の学校や集落に識字用図書・教材を届けています。この何年間で私たちのプロジェクトもこの地域の識字向上に効果を上げることが叶い、対象校の一つであるTowerkop 小学校が、最もめざましい識字向上を達成したとして賞金を授与されました。

プロジェクト運営委員会は毎年開催されるWorcesterでの移動図書館会議に出席すると同時に、ゾアール移動図書館関係者会議を年4回開催し、情報や体験を分かち合っています。



「いずみ号」と呼ばれるいすゞ自動車バスは、何年にも亘ってすばらしい働きをしてくれたのですが、今は冷却機能とオイルポンプの調子が悪く長距離運行からは退役しております。

しかし短距離用にはそのパワーはまだ捨てたものではなく、3つの小学校と3つの子ども会に走ってくれています。（末尾にその具体的な情報を一覧表にしておきます）

この間、西ケープ州教育省から新しいバスを一台支給され、そちらが長距離運行を担当しています。目的地には舗装されていない凸凹道をかなりの時間をかけてたどり着くといった状況ではあります。

プロジェクト運営委員会は、この15年間、一人のメンバー交代を除いては、設立当初の面々で続けています。貴会が私たちの活動にお寄せ下さる関心に感謝し、いつまでも心にとめて活動し続けたいと思っています。



いざみ号運航先一覧

小学校/子ども会名	教員数	学習者数
Zoar E.K. Primary	15	360
R.P. Botha Primary	7	250
Amalienstein Primary	11	333
Alabama Playgroup	4	78
Buzy Bees	6	80
Toddlers	3	35

(訳 大友)

[Page Top ▲](#)

2015-2-26 日本

3団体で要請書を送付いたしました

TAAAは、「特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター（JVC）」と「任意非営利団体二バルレキレ」と共に、産経新聞（2月11日付）の曾野綾子氏のコラム『透明な歳月の光 労働力不足と移民「適度な距離」保ち受け入れを』が、アパルトヘイト政策を推奨しているように読めることから、当該コラムの撤回を求める要請書を作成し、2月25日付で曾野綾子氏および産経新聞に対して送付しました。

是非お読みくださいませ。

[産経新聞（2月11日）コラムの撤回を求める要請書](#)

[Page Top ▲](#)

2015-2-11 日本

1月12日（月・祝）TAAA講演会（5）

2部 講演 平林 薫 <質疑・応答>

Q1. （荒らされた図書館の写真について）何のために図書館を荒らすのか？

A1. 何があるのか分からずに入ったが、本はいらないのでただ荒らして帰ったのだろうと思われる。今は図書館は使えず、本は校長室に保管してもらっている。

Q2. （成績優勝者の表彰について）優秀生徒をしっかり把握するシステムがあるのか？

A2. ある。科目ごとに上位生徒が把握されており、トータルの結果を卒業式に発表している。学校との関係が出てくるにつれて、昨年から卒業式に何度も招かれるようになり、大変光栄。

Q3. 本の選別・寄付はどのように？

A3. 各校がほしいとしている本をその予算内で注文するのだが、予算が足りずに購入できない場合に注文がくる。図書室用の本を学校で買うのは厳しいので、英語の本はTAAAから寄付している。

Q4. 男子生徒に対してロールモデルがないということだが、職業を紹介するような教材はないのか？

A4. アパルトヘイト時代はしっかり農業が教材に入っていたが、今は「農業科学」の科目の中で大規模農業のことしか書かれていない。実地がほとんどない。多様な仕事について学ぶ機会があるのかは分からぬが、あまりないのでないのではないか。

Q5. 学校に図書館の設置を義務づける法律がないと聞いているが、法的取り組みが必要で、そうでないと今後も学校図書館は増えない。教員自身による教材開発や、授業の材料を調べるための教員の支援も必要。教員同士のネットワークができれば良いと思う。障害児支援も必要だと思う。

A5. 先生方は時間になつたらすぐに帰ってしまい、もうちょっと頑張ってほしいという気もする。教師達自身も取り組み方が分からぬのではないか。休みも絶対に学校に出てこない。

Q6. 2050年という区切りで考えたとき、南アはこれから35年後どうなっていると思うか？自分が初めて南アに行ったのが35年前だが、今と比べてどの程度変わったと言えるか。。。

A6. ポテンシャルを持っている人は多い。自分達のやりたいことができる状態ができたらいい。間違った方向に進んでしまったら大変だが、正しい方向に向かっていけば凄く大きな力になる。

〈久我 祐子 TAAA代表 より〉

TAAAは菜園活動も図書活動も委員会をまず作った。子ども達は委員会として、主体性をもつて、創意工夫をして、自分達でいろいろ考えて、「これは自分達のプロジェクト」という認識を持っている。そうした子ども達が教員・大人になった時、いろいろやってくれるのではないかだろうか。本当に小さいことだが、そうした生徒達が育っていくと、彼らが地域のロールモデルとなり、30年後変わってくるのではないか。



Q7. 学校菜園から家庭菜園に繋がっているというが、ビジネス化していくことはないのか？

A7. 家庭菜園は今はまだ家庭や地域内だけで、一般販売まではいっていない。学校菜園で採れたものは、先生が買うなどして学校の資金になっている。食材として給食に使ったりもしている。

Q8. ポートエリザベスに住んでいた10年前、近所の人に「作物を盗まれてしまうので家庭菜園はやらない」と言われたことがあった。農業というとらえ方ではなく、家庭菜園をしている家庭は結構あるのか？

A8. 何らかの工夫をして何かをするという取り組みが見られない。家庭菜園というものを知らない、見たことも聞いたこともないという人が多い。プロジェクトをきっかけにいろいろと知られてきているので、少しの情報と少しのアドバイスで凄く良くなっていくと思う。

Q9. リチャードさんが自分の農場で子ども達を雇うということはできないのか？リチャードさんの人脈を活かすことはできないのか？

A9. リチャードの農場は小さく、スタッフは2人くらい。彼の専門は家畜なので、菜園活動とは少し違う。マーケティングや他の仕事もあって、彼の仕事は子ども達に直接は参考にならないこともあって、難しい。



2015-2-7 日本

1月12日(月・祝) TAAA講演会(4)

2部 講演 平林 薫 (TAAA南ア事務所代表)

1. 南アの社会・学校・菜園

- 活動地域のクワズール・ナタール州ウグ郡は、サトウキビ畑が広がる自然豊かな地域で、現在40校を対象に学校菜園の支援活動を行っている。家庭菜園も奨励している。
- 学校菜園で採れたものを自分達で調理して食べたり、苗を家へ持ち帰って、家庭菜園を始めたりする家もある。
- 将来農業をやりたいという子どもも出てきている。
- 生まれた時にはアパルトヘイトは終わっていた子ども達だが、多くの若者は夢や目標を持てずに生活している。アパルトヘイトは終わったのに何も変わっていないという状況がある。
- アパルトヘイトが終わった時に生まれた子どもは20歳になるが、社会全体が変わるにはまだ時間がかかる。確かに変わってきた部分はあり、先進国のように力をつけてきた部分もある。しかし大多数の人々にとっては変わっていないか、またはより悪くなっている。リーダー達は既に多くを持っていても、「もっとほしい」という風潮がある。
- タウンシップの人達はアパルトヘイト時代に自尊心を徹底的に破壊されており、ロールモデルがないので、何をしたらいいのか分からぬ。職業として農業を行うというのも考えられない。
- 社会保障はしっかりとしている。老齢年金に親戚までが頼っていたりするが、社会保障に対する依存も生まれている。母親が養育支援金を街で貰ってそれっきりということも。年金の強奪や詐欺といった社会犯罪も起こっている。
- グループ作りから始めて、わずかな収入を得るCWP (Community Working Program) というのがある。メンバーは圧倒的に女性で、次のステップに繋がるものなのだが、グループ同士で足の引っ張り合いもある。ノウハウ、資金繰り等、企業がもう少し支援してほしい。才能がある人は多いのだが、何かを始めるきっかけがないので、それを発揮する機会がないのである。
- 現在、南アは電力不足の状態にある。計画停電があり、1日1回2時間程度の停電だったが、現在は1日2回になってきている。今年はもっと多くなるのではないかと懸念している。ウルドーのメンバーに「電気がなくて大変だ」と話すと、「人々電気はないので、生活は何も変わっていない」と言う。学校には電気があるので、携帯の充電やサッカーの試合観戦のために勝手に入ってきて、騒いで、何かあれば持っていくこともある。『待っても待っても自分達は忘れられている』、「支援がここで離れてしまうのではないか」という気持ちが人々の間に広がっている。
- 圧倒的に女子生徒の方が活発で、優秀だ。卒業式で表彰される最優秀生徒は圧倒的に女子が多い。男子は力を発揮しきっていない。「一生懸命はかっこ悪い」という考え方があり、男子は特に地域や家庭にロールモデルがないので、男子をみていると「サポートしない」と思うが、地元の若い男性スタッフが男子生徒にいい影響を与えている。身近な警察官やソーシャルワーカー志望が多く、そうした夢や目標をはっきり言える生徒は良いのだが、そうでない生徒のサポートが必要だと感じている。



- 教師には保護者やソーシャルワーカーの役割も求められている。中には労働組合間の争い、政党間の争いを学校にもってくる教師も多い。生徒達は教師をよく見ていて、学校内でそうした対立があると学校も荒れてくる。自分は部外者だからこそ、ちょっとしたことがあると頼ってくるということもある。
- 親が老齢等のため学校に出て来られず、保護者会が成立しない学校もある。
- ファシリテーターのリチャード・ハイグは、農場を持っている白人男性ということで、一見イメージは悪いが、リチャードが来ると一気に先生方はのめり込まれる。とにかく情熱（Passion）が凄い。生徒達は何かに携わる機会、何かを体験する機会が少ないので、農園活動は良い学習の機会、体験学習になっている。

2. 図書支援

- レベル別にある程度分けて送られてくるものをさらにグレード別に分け、学校に寄付している。
- 学校側は古い教科書は全部リサイクルに出し、読める本に入れ替える。
- 何もなかった教室が、ボランティア貯金の活動で本棚が贈られ、TAAAからは本が贈られて図書室に変わっている。
- いつ行ってもコンテナ図書館にいる男の子がいる。
- 小学校で本に触れ、中学校に上がっても本を読む習慣づけを司書がやってくれている。
- 男子生徒には冒険ものや漫画（Cartoon系）が人気で、人のとった本をすぐに読もうとする傾向がある。
- 女子生徒の方が男子生徒よりもしっかりと本を読んでおり、読み始めたら止まらない。
- 図書委員会が始動して良くなつていった矢先に、図書室に何者かが侵入し、荒らしていったという事件があった。

3. サッカー支援

- W杯後だが、道具や設備はまだまだ不十分なので、サッカーボールの寄贈は非常に喜ばれる。
- お兄ちゃん達が遊んでいると、女の子が果敢に入っていくような場面も。
- 女子生徒はサッカーボールを使ってネットボールをして遊ぶこともある。
- TAAA会員の森さんが作ったサッカー・マニュアルが非常に好評だ。
- 図書館バスのバッテリーを盗まれた時に、調査に来た警察官がサッカーボールの寄付活動を行っていると聞き、寄付したこともある。
- 卒業式で最優秀生徒には本や賞状を渡すのだが、スポーツの最優秀生徒にはサッカーボールを贈った。その生徒がずっと片時も離さずボールを抱えていたのが印象的だった。



(記録：米山)

[Page Top ▲](#)

2015-2-5 日本

1月12日（月・祝）TAAA講演会（3）

1部 講演 サンディーレ・ムカディ <質疑・応答>

Q1. 6つの性格分析について、もう少し聞きたい。

A1. 1つの分析方法ではあるが、路上で見せる顔と、家で見せる顔とでは違う子どもも多い。子どもの性格を単純に6つに分類して、「この子どもはこのカテゴリー」と1つにくくることはできない。その子どもがどういう子どもなのかを理解するのは本当に難しい。

Q2. どのような職業訓練があり、それを受けるための条件とは何か？

A2. 家に戻った子ども達が対象。月曜日から金曜日までで、休日は必ず家に帰る。保護者にも分かってもらうことが大切。内容には識字教育、溶接、音楽等がある。

Q3. この活動を始めるきっかけは？

A3. オーストラリアの取り組みを知り、大きな影響を受けた。自分はサーファーでジャッジでもあったので、路上でただぶらぶらしている子ども達にサーフィンを教えられると思った。何かで忙しくさせておけば、悪さをする時間もない。

Q4. 活動資金はどうしているのか？

A4. どの団体も活動資金の確保は大きな課題だろう。プログラムごとに予算がつくのだが、今はオランダからの支援があるだけ。5年間の資金援助を受けたら、必ずウムトンボを離れてもらうことにしている。自分達が稼いでいると思われたくないし、「向上していない」とも思われたくない。資金確保にはいつも悩まされる。

Q5. ストリート・チルドレンはなぜ発生するのか？

A5. まず親に職がないことが多い、それに子ども達が耐えられない。子ども達も家庭の状況が厳しいことは分かっているので、親に食べ物を求めない。他にも親が事故に遭ったり、HIVで亡くなったりして孤児になることもあるが、近隣や親戚の人々の世話にはなりたがらない。年金や社会保障を受けている家の子どももいるが、結局路上に出た方が、何にも縛られずに自由を感じる子どもも多い。路上で物乞いをして、親がそれに支えられているケースもある。女の子は売春も多い。数年路上生活が続くと、なかなか普通の生活に戻れなくなってしまう現実もある。

Q6. ウムトンボから学校に戻らることはできないのか？

A6. 学校訪問は行う。一旦子どもが家に戻ったら、私達は校長先生と話して、翌年度から学校に受け入れてもらえるように働きかける。年度途中で入ることは難しいので。制服がないで学校に通えないことがある。またタウンシップの学校を訪問して、子ども達に路上に出ないように働きかける「アウェアネス・レイジング（Awareness Raising）」のプログラムもある。



(記録：米山)

[Page Top ▲](#)

2015-1-31 日本

1月12日（月・祝）TAAA講演会（2）

1部 講演 サンディーレ・ムカディ

(南アNGO「ウムトンボ」スタッフ・2014年南ア・スポーツ賞ボランティア部門金賞受賞)

- ストリート・チルドレンからはたくさんのこと学んでいます。彼らは主に14歳から20歳までの若者だが、彼らがなぜ路上にいるのか、皆それぞれ異なる理由がある。
- これまでおよそ100人の子ども達のケアを行い、60人を家庭に戻すことができた。
- 体操、サーフィン、ウォーキング等を通して子ども達の生活のリズムを整え、家庭訪問等も行ったのが成功の要因だと思っている。
- まずは何より子ども達の振る舞いや行動について理解することが大切。
- 子ども達の振る舞いや行動を引き起こす性格の分析は、心理学の手法を使って行っている。子ども達を次の6つの性格に分類し、どのカテゴリーに属するのかを把握してから、個々の子どもにアプローチしている。
 1. ハーモナイザー (Harmonizer) : 常に相手に対してのリスペクトを持ち、平和を貴ぶ。
 2. パシスター (Persister) : 自分の信念に固執し、とにかくそれを主張する。
 3. シンカー (Thinker) : 全てを時間通りに、考えながらしっかりと行う。
 4. イマジナー (Imaginer) : あらゆる想像を巡らせながら、ゆっくりと事を進める。
 5. レベル (Rebel) : 常に強気で反抗的。
 6. プロモーター (Promoter) : 自分に自信があり、自分を見てほしいとする自己顯示欲が強い。
- 元々ウムトンボにはサーフィンのコーチとして入ったのだが、今はソーシャルワーカーとして子ども達のケアを行っている。
- 家に戻った子ども達で印象に残っているのは、家庭環境が複雑だったステロノモ君、11歳から路上生活を続けていて18歳で家に戻ったブツーマ君、洋服や食料を持たせて帰したスマンガ君等がいるが、路上生活が長いと家庭生活ができなくなってしまい、結局路上に戻ってきてしまう子どもも多い。一方で、モンデッテレ君はストリート・チルドレンのためのワールドカップ大会に出場して、自信をつけて家に戻り、現在も頑張っている。
- ウムトンボには、「ポスト16 (Post 16)」という16歳以上にライフスキルを教えるプログラムもある。街から離れて技術習得に専念できるもの。
- なぜ子ども達が路上で生活してしまうのかを知ってもらうための、親を対象としたペアレント・ミーティングも行う。
- 長い休暇中に子ども達が問題を起こすことが多いので、この時期にイベント等の開催も行う。
- ドラッグに関わる子どもが多いので、とにかく、朝に散歩をしたり、体操をしたり、スポーツやレクリエーションをしたりすることで、何かに関わらせ、ライフスタイルを確立させることが大切。
- 昨年はピースボートで南アに来ていた若者らが活動を協力してくれた。



<平林 薫 TAAA南ア事務所代表 より>

2014年南ア・スポーツ賞の表彰式がサントンのコンベンション・センターで行われた。表彰では30秒のスピーチがあるのだが、サンディーレは「隣の人に『愛している』と言って下さい (Say I love you to people next to you)」と語り、大盛況だった。



(記録：米山)

[Page Top ▲](#)

2015-1-31 日本

1月12日（月・祝）TAAA講演会（1）

南アフリカ民主化20年を迎えた子どもたちの今 ～なぜ生きづらいのか・どこへ向かっているのか～

浦和のコミュニティー・センターで行われた今年の報告会は、2014年南ア・スポーツ賞ボランティア部門で金賞を受賞したサンディーレ・ムカディさんと、TAAA南ア事務所代表の平林薰の二人を講師として行われました。

ムカディさんからは、ストリート・チルドレンの実態やその支援活動についてご報告をいただきましたが、報告半ば、来場者全員にバナナを配り、皆で「バナナの歌」（？）を歌いながら食べていくというアイスブレイクを入れるなど、終始非常に和やかな雰囲気で行われました。



平林さんは、南アの現在の状況、TAAAの菜園・図書・サッカー支援等の活動を、子ども達や学校の写真スライドを使いながら紹介しました。

参加者から多くの質問や意見も出て、あつという間の大変有意義な3時間となりました。ご講演の内容につきましては、数回に分けてご報告させていただきます。

（米山）

[Page Top ▲](#)

2015年2月25日

曾野綾子様
産経新聞社御中

2月11日付コラムの撤回に関する要請

私たちは、南アフリカ共和国にて初の全人種参加選挙が実施され、ネルソン・マンデラ大統領が誕生した1994年前後より、アパルトヘイト（人種隔離）政策が残した社会問題に取り組むため、現地で活動を続けている日本の国際協力団体です。そのスタッフ、関係者的一部は、アパルトヘイト政策を終わらせるための運動にも関わってまいりました。

この度は、貴『産経新聞』2015年2月11日付朝刊7面に掲載された、曾野綾子氏のコラム「透明な歳月の光 労働力不足と移民 『適度な距離』保ち受け入れを」に関して、下記の二点について提起し、当該コラムの撤回を要請したく本書面をお送りいたします。

1. 「南アフリカの実情」を踏まえ「人種ごとに居住区を分ける」ことを推奨することの問題

曾野氏は、コラムの中で「高齢者の介護のための人手を補充するための労働移民の受け入れ」について持論を展開され、その中で「外国人を理解するために、居住を共にすることは至難の業」であり「もう20～30年も前に南アフリカ共和国の実情を知って以来、私は、居住区だけは、白人、アジア人、黒人というふうに分けて住む方がいい、と思うようになった」と述べられています。

ご存知のとおり、1910年の南アフリカ連邦の成立以後から、1948～1994年まで実施された「アパルトヘイト（人種隔離）政策」下で、南アフリカの人びとは人種ごとに居住地を指定されていました。それぞれの人種を言葉どおり「隔離」することが目的でしたが、その背景には特に黒人たちを「白人のための安価な労働力」として管理するがありました。アパルトヘイトは、黒人たちに指定居住地からの自由な移動を禁じ、税金を課し、彼らが現金収入を得るために白人たちが経営する鉱山や農場、あるいは家政婦等として、低賃金で働くことを余儀なくされる「出稼ぎ政策」でもありました。その際、黒人指定居住地は「（労働力の）リザーブ」＝「保留地」と呼ばれており、黒人たちは「人」として扱われず、あらゆる人権をはぐ奪された状態に置かれていました。この過程で、彼らは自分たちがそれまで営んできた農業や商売等の生業を禁じられ、自分の力で生きていく術を奪われ、「白人社会」での労働に依存せざるを得ない社会構造が出来上がりました。これらは全て人種ごとに居住地を分けることで可能となったことです。

この結果、全人種参加選挙による民主化から20年以上が経った現在も、南アフリカの多くの人びとはアパルトヘイトの後遺症に苦しんでいます。民主化は南アフリカから制度上の人種差別をなくしましたが、教育や生業を営む機会が長年奪われてきた黒人たちが実際に職を得て、自立して生きていくことは難しく、世代を超えて負の連鎖が続いたまま、同国では貧富の格差が広がり続けています。依然として人種ごとの居住地が解消できていない現実が一部に残存している原因もここにあります。現在、GDPが世界33位¹の南アフリカは、その内実を見れば、世界第4位の格差社会²でもあり、経済的繁栄の陰で食べることすらままならない人も少なくありません。

¹ World Economic Forum, The Global Competitiveness Report 2014-2015.

² UNDP (<http://hdr.undp.org/en/content/income-gini-coefficient>)。データによって2位のものもある。

当該コラムに対する南アフリカ共和国のモハウ・ペコ駐日大使からの抗議を受け、小林毅産経新聞執行役員東京編集局長は2月14日付の貴『産経ニュース』で「産経新聞は、一貫してアパルトヘイトはもとより、人種差別などあらゆる差別は許されるものではないとの考えです」とコメントを出されました。また曾野氏は2015年2月26日号『週刊文春』で同抗議に対し「私のエッセイの中の、『差別』と『区別』の差がきちんと伝えられていない」として、「居住問題は人種問題と切り離して考えるべきだ」と述べておられます。しかし、上述のとおり、南アフリカでは居住問題と人種問題を切り離して考えることはできず、またアパルトヘイトの遺制を前提にせずにこの問題を取り上げることは不可能です。人間を労働力ととらえ、労働と居住を分離し、人種ごとに居住区を分けることはアパルトヘイトに通じる考え方であり、それはすなわち『区別』ではなく『差別』です。

2. 「ジョハネスバーグのマンション」の一例と南アフリカ社会の現実との乖離

二点目として、曾野氏がご自身の主張の根拠として挙げている「ジョハネスバーグのマンション」の例について提起いたします。このような事例について、私たちが現地で周囲の知人たちにたずねたところ、人種に関係なく、全員がその内容は社会の現実ではないと否定しています。現地に暮らしている私たちの目から見ても同様です。また、そもそも曾野氏が偶然出会った一例を根拠として、新聞という公の媒体で、南アフリカの社会を語り、人種ごとの居住区を提案すること自体が問題ですが、同時に、このような話を「誰のどのような立場から」聞いたのかという点も重要です。なお一例、という意味では、私たちの一人が現地で暮らすなかで同様の経験をしたことがあります、その際は、守るべきルールについて住人同士で話し合い、最終的には多様な人種の住人たちが納得し、共生できるようになりました。その結果、他に行く場のない老白人を黒人住人が気遣う姿も見られるようになりました。私たちは同じ人間なのです。知る前に離れるのではなく、まずは共生して互いを知るよう努力することが大切なのではないでしょうか。

現地の人びとが日々の暮らしにおいて、多くの場面で人種を超えて生活の場を共にし、交流し、助け合うことは日常的に見られる当たり前のことになっています。また、私たちの支援活動でも人種を問わず共に働き協力しています。確かに一部では今も人種間の差別が残っているものの、それはお互いの暮らしや人となりを知らずに過ごしてきたという恐怖感ゆえであり、やはり背景には、居住地を強制的に分けてきたアパルトヘイトの歴史があります。当該コラムにいち早く駐日南アフリカ共和国大使が反論された理由は、まさにそこにあり、南アフリカと日本人びとの交流に長年努めてきた私たちも強く賛同する次第です。

以上のことから、曾野氏が『週刊文春』で上の発言に続いて述べておられるように、「南アの発展のためにも平等は当然のこと」とお考えであり、貴紙が「一貫してアパルトヘイトはもとより、人種差別などあらゆる差別は許されるものではない」という主張を示されるならば、2月11日付の貴紙当該コラムの内容を撤回すべきと考え、ここに要請いたします。

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター (JVC)
特定非営利活動法人 アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA)
任意非営利団体 ニバルレキレ